海乃自覚

特別
へ5
6590
22

へ5
6590
22

家翁萬故小祥志

雲林保雄進撰

土佐岸本宇吉松陰連松古編

遠遠民方故翁を言ふ家は星霜を
出勤いと尚孔く打ち忘れて八時の後日
所く吉徳の貝殻いと鶏鳴乃ち紙
叩く民庶の面を傳ひもと二度京者
時を俗世を始め吉師ふ贈とと
代を意流乃ち教を重人去りて秋三
風鶏の四友了園深きものと宿事無
義子に曲和く星岸本浦り

帰国する為相模国の長うして老成
養する所地中あり海あり東に山ありて
葬る月見山常に朱色と云梵閣
あり是則
土御門右帝紀五年跋あり延喜帝
帝此書を以て和漢稱史野語の
作り聚世と云域稱世と云今
相老孤松あり頃日見て人を以て九尺

宏所なる所は山下小高く成て山中に
流れ菴と号し風雅三昧の安居し戒み
猶厳しく乱れなく成て四季に
導く事七十余歳年頃日を海月と
崇む事の舎利の如し天寿の流るや
去る文化仲秋月見山の月を宴中
跡を乗れ乱れ浮世の旅と云百年隙
清く人寿を延新松の花枝を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

をしむ目のひやゝ[illegible]涼の身に沁る　鶴山

萩の葉ふるとも[illegible]雨の音　松古

[illegible]秋ふる[illegible]て　松直

[illegible]心[illegible]なる[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遊るみちにおもむく月　如水
花つく底うちと感じて　柳葉
辻占うり来るつと答ふ我行先にて　心月
安濃津の港に寄る　一瓢
初雲乃ゆうゝ撫子薬店　一止
いとをつゝやる妊り形荷　五禽
三月
三とうもう来たことを　笑
海岸の椿紹乃孜形宍　宇琴
　　保花

牛吼る葛餅の傍を過て一里　寺の
あれ持帰り軍もむ　松坡
伊事も字なる背ゐぬ孝そう　雪友
禊祓法を色そいと紀雪やけ　一夷
宝也忘乃あとを写る紀伝素月　花仙
小写まの新蕎て水上　巴法
かるゑさゝ竹て自刑う三掃半　宇松

左歌仙行一巻

[illegible]

入る涼しく花なつめわう月　秋山　岸女

[illegible]

[illegible]風憶ふ亡友待秋うれ、　柳糸

[illegible]と涼きう月やおうもうん、　心月

父の小祥忌うり生ゆ[illegible]

[illegible]

忙き[illegible]中愛おきまゆ[illegible]　男　松古

[illegible]月うおひ[illegible]れぬとうれ来　[illegible]清

[illegible]あ伊[illegible]や月　[illegible]　孫　[illegible]松

列坐　[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]祥忌

[illegible]や秋の海　[illegible]　吉衆　松窓

[illegible]れ　一止

かゝるこゝろ人うゝ罪ふかんう那 丈市 如水
一静うこゝろ居るや窓ゝきし、 波英
糸垂乃きゝやちうん釣魚の上 養寺 雪梶
蝶のまと庭うの梅てゝなゝう 吉宗 鶴仙
街道うゝ童乃あゝや秋 月、 柳雨
稲穂のおさえふうう霧吹雨、 五葉
お前れゝと惜も乃垂る芭蕉の花 秋化 吐風
夕暮うゝ雪降るもの木下れ、 曲全

到るゝ秋ゝく戦おちく樹の小鳥哉、 一瓢
ちゝきく代葉うゝ沈さ月乗れ、 一雲
暁蟬うゝ月出る遅し庵那う 緋 赤彦 杜果
秋ゝく中みゝと蘆子 松の上、 雪皮
祉笠ゝ秋猫あゝや久しゝれ、 岩ヒの
のゝちゝ小去の深山森れ 岸水 辛翠
ちゝもゝ立川や帝なゝう、 鼎花
夢ゝ秋ゝ拐ちゝ庵うゝ 千佳 左港

軒うまく風色見ゆる若葉かな　北佐　松坡
萎て茶の雨ふかゝす接木哉　下総　花仙

追加

露結しう字や柳葉拾ふ箸の跡　安芸　後衛
秋晴く雲見ゆる秋の宗波かな、可楽
笠の高き流むや花見け幕の内　摂　午松
鳥帽子秋南見ゆ酔て居るあり　東京　知足

六

大藪の雀こそれ揉らしおかぬの月　、柳嶋
こがらしや霧れし鴨の口明三羽　播　春堂
来そうれ行う夜雉や南行雲　久板　吐月
初東風や春も揃ひし神門前　相模　自若
折こすや那月見夜乃浪りしら　田村　是同
畑の舞ゝ梅もおそかり鶯菜　、可水
吹りぬゆき夕くれゝ柳かな　、和光
芒秋の花おちろ乃つきし月夜哉　山田　宗穂

萩掘き上るく碑の文字雨ふる
窓の扉うつくしく流れゆく時の文　董行
せゝらぎや梅雨の夕日残る山　啓君
小屋を隠むる青ふかれる夏蔭　知
宿風や人まち出のかゝるまゝ　自樂
本の写さるる雨ふる家遠し　桃英
青ふかれる乃至かなれて梅雨　深笠
人まちのちいさくなるし汐干小　風洲
　　平山　酒麗
　　嘯月　青風
　　嘯月　夷三

七

もの孫吟さるかなれや個代ち　蛇君
琴詩酒を影乃友よみるゝ　魯三
夕影やなるんて赤ふ点の夏　子
　　警江

四方を眺めて反祝老の小稿を
なれ淋しき思ひをなぐさ
聖と雲紙
待雪の松ぐ澄ふるを
高砂を立てるのかぐ
高砂屋喜左